

幼稚園における

自由遊びの指導に関する研究

大久保 和 子

はじめに

「自由遊び」ということばは、幼児の自発的な活動を尊重する立場から生まれたものであるが、その概念は一樣でなく、指導の方法も様々である。特に現行の幼稚園教育要領が昭和39年に改訂され、幼児の活動の形態を三つに区分して、「幼児がみずから選んで行う経験や活動」、「グループで行う経験や活動」、「学級全体で行う経験や活動」としたときから従来の「自由遊び」と現行の「幼児がみずから選んだ遊び」との関連は一層混乱したようである。

すなわち、この「幼児がみずから選んで行う経験や活動」というのが、従来の「自由遊び」にほぼ似たものであると考えられたり、反面では、これは幼稚園で幼児が実際に経験や活動をするときのし方を「ひとりで・グループで・学級全体で」というように指導形態をあらわしたものであって、従来の「自由遊び」の概念とは異なるものであるとも言われるのである。この対立する意見は、そもそも「自由遊び」そのものの概念の違いに起因するものと思われる。

自由な遊びが幼児にとって、その心身の発達を促進する上で重要な役割をもつものであるとしながらも、幼児教育界では多様な議論が展開されてきたのである。

このような現状の中で、あえて「自由遊び」のことばを使うのは、自由遊びが本来幼児の興味や欲求に基づいて、幼児みずからが遊びを選択し、遊び場も、遊びの方法も、遊ぶ仲間も自由に、自分の意志で選んで行うものであれば、そこには幼児がみずから選んでひとりで遊ぶこともグループで遊ぶこともあり得ると考えるからである。すなわち、「自由遊び」は幼児教育独自の指導の形態も方法も含まれたことばとして改めて考え直すことはできないであろうか。

現在の幼稚園教育がややもすると「自由遊び」の項目消滅に伴い、統一的・画一的な指導が濃くなる傾向にあるので、幼児の自発活動を尊重した「自由遊び」の指導のあり方を探ろうとするものである。

図1. 幼稚園における主な活動の時間的割合

1. 自由遊びの実態分析

(1) 自由遊びの時間的割合

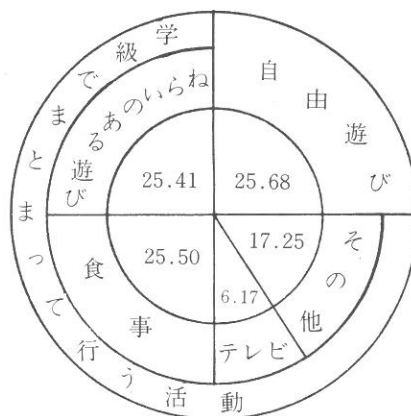
幼稚園の保育時間は1日4時間を標準とし年間教育日数は220日を下ってはならないと「学校教育法施行規則第75条」に示されている。

岡山市内Y幼稚園における1年間の保育実践記録^④によると、教育日数は232日で、保育総時間は792時間45分で1日の平均保育時間は3時間25分となり、標準よりやや低いことになる。

幼稚園の恒常的な日課の中で自由遊びの時間はどの程度のものであろうか。

そこで、自由遊びの時間が保育総時間に占める割合をみたものが、図1である。この図が示すように、自由遊びの割合は25.68%であ

(%)



り、学級全体でまとまって行う活動のうち、教師が中心になってする活動（以下ねらいのある遊びと言う）の25.41%とほぼ同程度となっている。このことは、幼稚園において自由遊びがねらいのある遊びと同様になりに重要な位置を占めていると考えてよいだろう。

さらに、月別に自由遊びとねらいのある遊びとの時間を表1に表わし検討をする。

表1 自由遊びとねらいのある遊びの時間の割合 (%)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
自由遊び	32.18	21.92	23.41	21.47	29.96	26.61	27.68	27.29	28.36	21.17	28.4
ねらいのある遊び	26.27	23.31	20.58	31.57	24.53	22.68	23.59	28.32	29.16	29.68	29.2

自由遊びの時間がねらいのある遊びに比較して、最も高い割合を占めているのは4月であり、続いて9月、11月、10月である。また逆に自由遊びの時間が少なく、ねらいのある遊びが多い割合を占めるのは7月、2月である。その他の月は大体同じ程度の割合になっている。このことを遊びの充実度と関係深い集団生活の適応の面から考察すると、入園当初のまだお互い同士が知り合わず、集団生活の緊張がかなり大きく、学級でまとまった活動に参加できない幼児がいる段階では、幼児一人ひとりが自分の思いのままに遊びの場を選び、思いのままに遊びができるように個人差に応じた時間的な配慮が必要となる。したがって、4月においては、ねらいのある遊びに比較して自由遊びの割合が大きいの当然であり、望ましいことであろう。また9月、10月ごろになると、それまでばらばらであった幼児たちが集団生活に慣れてきて、簡単なことならグループの共通の目標を意識して行動できるようになる。また「きまり」を守って遊ぶことも可能になり、それぞれの幼児が自分の主張をもち、相談したり、協力しながらかなり創造的な遊びを長時間続けることができるようになる。したがって、この時期も自由遊びの時間が多くなるのであろう。

次に、自由遊びの時間が少ない7月、2月は季節的な面から戸外遊びが限定されるためであらう。2月の場合、発表会の準備のためにねらいのある遊びが多くなり、幼児が自由に遊べる時間が削減されたものと考えられる。

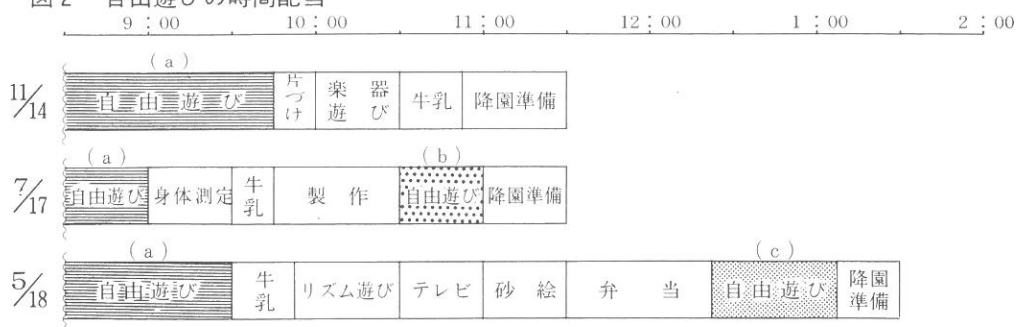
この時間配分について、坂元彦太郎は「いちばん大雑把に言えば1日をおよそ半分は自由遊びで、残りをいわば教師の計画的な指導の下にある活動にあてるという考え方が成り立つであらう。人によっては、その比が6：4になったり、4：6になったりすることもあるだろう」と『幼児教育の構造』で述べている。このことは、単に時間配分のことだけでなく、幼児教育方法の基本的な考え方を示しているのではないだろうか。

(2) 1日の生活と自由遊び

幼稚園の1日の保育時間は、前述のように平均3時間25分であったが実際には3時間から5時間位である。その中で自由遊びの時間は、どのように配当されているかをY幼稚園の資料にもとづいて、1日の生活との関係について考察する。

全体的にみると、自由遊びの時間の配当には図2に示すように3種類の型がある。

図 2 自由遊びの時間配当



(a)は、登園にひき続き学級でまとまって活動するまでの間にとりあげられるもの
 (b)は、ねらいのある遊びやその他学級でまとまって行う活動の後にとりあげられるもの。
 (c)は、食事の後にとりあげられるもの

以上のように大別して考察すると、(a)が年間通して圧倒的に多く、登園直ちに園外保育にいくとか健康診断がある、など特別の行事がない限り毎日設定されている。

自由遊びの提唱者であった倉橋惣三は『幼稚園真諦』において、「幼稚園の朝というものが1日の保育に非常に重要な関係をもつことになります。すべて出発が大事であることは言うまでもないことで…」と、さらに「幼稚園の朝は、先ず自由遊びから始められるのが自然でしょう」とも述べている。このような考えが基本となって、現在の幼稚園に朝の遊びが定着したものと思われる。

(b)(c)は、休憩時間的な性格が強く、ねらいのある遊びや緊張のある学級全体の活動などの後で解放感を味わせようとするものであり、また個人差を考慮した時間調整の役割も持っているようである。

(3) 朝の遊びの時間と内容

幼稚園における自由遊びの中心は、朝登園した幼児が自分の持ち物の整理をした後、自分の興味や欲求に従って、あるいは自由な意志に基づいて遊びの場、遊具、友だちと自主的に選択して遊ぶ「朝の遊び」であると言えよう。

ところで、朝の遊びの時間と遊びの種類などの実態を明らかにする。

表2は、Y幼稚園の朝の遊びの時間を月別に表わしたものである。

表 2 朝の遊びの時間配当状況 (日数)

この表からもわかるように、朝の遊びの時間は登園時刻から9時30分位までの30分～40分位が当てられる日が非常に多い。なかには10分、70分の日も僅かであるがみられる。

この遊びの時間については、幼児の遊びの持続時間の面から検討する必要がある。幼児の遊びの持続時間は年齢、遊びの種類、個人の性格や能力などによって異なるものがあるが、一般に年齢とともに長くなり、3歳ごろになると20分以上の時間が認められる。牛島義友は、一つのま

分 月	10以下	11～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70
4		1	10		6		
5		2	12	5	1		
6		2	13	3	2		
7			6	1	1	3	1
9		1	11	6	1	1	
10		6	8	1	4		
11		1	10	6	3	2	
12	1	3	3	6	1		
1			12	2	2	1	
2		2	15	4			
3		2	4	4		4	2
計	1	20	104	38	21	11	3

とまった遊びの持続時間は、4歳で27分、5歳で31分と言っている。また、神沢良輔は、5歳児の自由遊びの時間を9時から10時20分まで観察し、幼児の活動の持続時間を表3のようにまとめている。

これらの資料を総合してみると、幼稚園の朝の遊びの時間は年間とおして固定的に配当されるものではなく、幼児の遊びの実態にあわせて、もっと流動的に考えられなければならないであろう。

次に、朝の遊びの種類や内容を岡山市立M幼稚園の観察記録²²⁾に基づいて、まとめたものが表4である。

表3 幼児の活動の変った回数、最高・最低持続時間(分)

月	活動の変った回数	最低持続時間	最高持続時間	平均持続時間
5	3.8	11.5	38.4	10
7	2.4	28.0	54.8	50
10	2.5	24.4	46.3	
12	2.2	28.1	50.0	
2	1.5	60.0	67.9	60~70

表4 遊びの記録表

▨ 遊びの活発な月
— 遊びが継続している月

主 な 遊 び		月											
		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
運 動 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・固定遊具や総合遊具で遊ぶ ・鬼遊びをする ・ジャンピングで遊ぶ ・すもうをする。 ・ボールで遊ぶ ・巧技台で遊ぶ ・とび箱やマットで遊ぶ ・バトミントンで遊ぶ ・ゴムとびやなわとびをする。 ・缶馬や竹馬で遊ぶ。 	▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
		▨	▨				▨	▨					
動植物との遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物と遊ぶ ・虫と遊ぶ ・草花・木の葉・木の実・花の種で遊ぶ。 	▨	▨				▨						
積 木 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・大積み木・キングブロックで遊ぶ ・カラーベルト・Bブロックで遊ぶ。 ・小箱やポリのあき容器で遊ぶ ・カラーリングで遊ぶ 	▨	▨				▨						
砂 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・砂や土で遊ぶ ・水遊びをする。 ・ぬたくり遊びをする。 ・小石で遊ぶ。 	▨	▨				▨						
集 団 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・集団遊びをする。 ・ゲーム遊びをする。 	▨	▨				▨						
製 作 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・版画遊びをする。 ・絵を書いたり作ったりする。 ・粘土で遊ぶ。 	▨	▨				▨						
ご っ こ 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・ままごとや人形ごっこをする。 ・のりものごっこをする。 ・ゆうびんやごっこをする。 ・お店やごっこをする。 	▨	▨				▨						
科 学 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ・じしゃくで遊ぶ。 ・虫めがねで遊ぶ。 ・こま・風船・たこで遊ぶ。 	▨	▨				▨						
絵 本 を 見 る	・絵本を見る。	▨	▨				▨						

これらの遊びのなかで、年間継続する遊びがかなり多い。それは固定遊具や総合遊具による運動遊び、ザリガニ・蛙・虫など小動物との遊び、積木・ブロックなどによる構成遊び、ままごと遊び、絵をかいたり作ったりする遊び、絵本をみる遊びなどである。また、季節的な遊びとしては、夏の水遊びや小石遊び、冬のこままわし、風船つき、たこあげなどである。

ところで、これらの遊びがなぜ幼児に好まれるか、その条件を考えてみると、①全身を使って遊ぶことにより、解放感が味わえる。②直接手に触れたり、継続観察ができたり、疑問をもったり、考えたりできる。③ひとりでも友だちと一緒にでも作ったり、壊したりして創造的活動ができる。④役割やルールを守って遊ぶうちに友だちとのかかわりが深まっていく、などである。

幼児がひとり、あるいは集団で自発的に行っている遊びの中には、4つの条件を満たしたものがしばしばみられる。

2. 自由遊びの指導分析

幼児一人ひとりが思う存分に活動するためには、その活動は幼児が自発的に選んだ活動であり、しかも自由に展開していくことのできる活動であることが望まれる。そこには、教師の指図や強制は許されない。と言って、幼児はすべて、いつでも自分で欲求し、自分で行動し、自分で満足することができるであろうか。

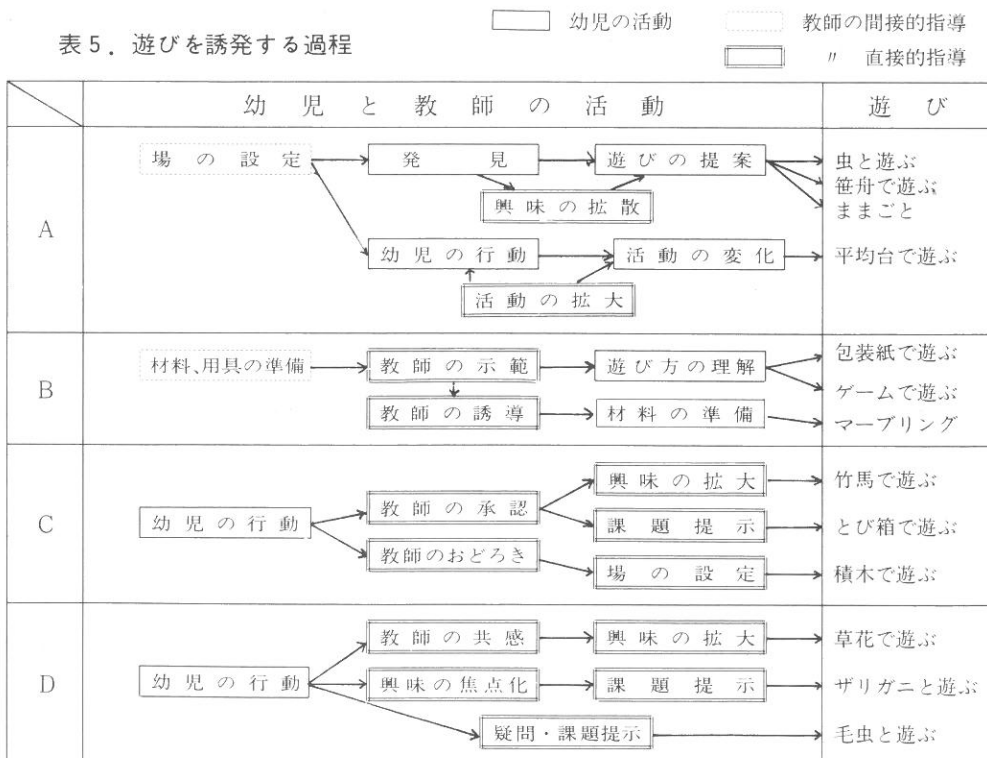
岡山市内の幼稚園で観察した自由遊びの実際指導^註の分析から遊びの発展と教師のかかわり方を中心に考察する。

(1) 遊びを誘発する要点

遊びの原動力となる幼児の興味や欲求は、どのような場合、何によって起こり、それがどのようにして遊びを誘発していくのであろうか。

表5は、幼児が遊びを始める動機となったものを4種類の型に大別して表わしたものである。

表5. 遊びを誘発する過程



A型は、教師が事前に意図的に設定した物や場所を幼児に発見されることから遊びが始まるものである。教師は、それらに働きかける幼児の行動を認め、その行動がより方向性をもった活動になるように助言したり、特定の幼児の興味を他の幼児へと興味を拡散するように助言を行う。そうすることによって、幼児自身が遊び方を発見したり、グループで互いに過去の経験や知識を交換して遊び方を決定する。

ここでは、教師が意図的に設定する環境構成が重要な要点になっている。幼児の興味・欲求が啓発され、自発的な活動を誘発していく環境構成をするためには、教師が正しく、適確に現在の幼児の興味を把握することである。

B型は、教師が事前に準備しておいた用具や材料を活用した遊びを教師がして見せたり、ことばかけをして新しい遊びを知らせることである。幼児は、教師が示範した具体的な遊びに動機づけられ、それを模倣しようとすることから遊びが始まる。

ここでは、教師が参加して直接遊びのモデルを示すことになる。この場合、教師は遊び方の基本を知らせることにとどめ、幼児の自由意志による創造性をできる限り発揮できるようにしておくことが大切である。

C型は、園庭や室内に常設してある遊具に幼児が働きかける行動によるものである。教師は、その行動に対して激励や助力を与え、技術的な面に新しい課題を提示したり、適切な場を設定して幼児の遊びへの欲求を強化させようとしている。

ここで重要なことは、常設する遊具が安全で多面的な幼児の活動を誘発するものであるかどうかをまず問題にされなければならない。次に、教師は遊具に働きかける幼児の行動をあたたく受けとめ、初歩的な興味や関心が持続するように、幼児の発達段階にあった技能的な面の刺激を与えることである。

D型は、幼児が生活の中で偶然遭遇したり、発見する事象や事物に対する感動から引き起こされる行動によるものである。教師やまわりの幼児がこの行動に共感し、驚きや疑問をことばや態度で投げかけることにより、興味は拡散されたり、興味の焦点が明確になったりする。そして、遊びや行動に新しい課題ができ、幼児は探索行動や確認行動を始めるのである。ここでは、教師が自然物や身近なできごとに関心をもち、共に行動したり、質問を投げかけたりして、幼児の内在于る興味に対する意識化を図ることである。

以上のことから、幼児の自発的な遊びを誘発するのは、先ず幼児の身近な環境であると言える。次は、その環境から刺激された幼児一人ひとりの興味や欲求を受けとめる教師の援助活動が重要な役割をもっている。この援助活動は幼児の無意識・無目的な興味中心の行動に楽しさを加えたり、遊びのイメージづくりを助けたりして次の段階への方向づけをしている。

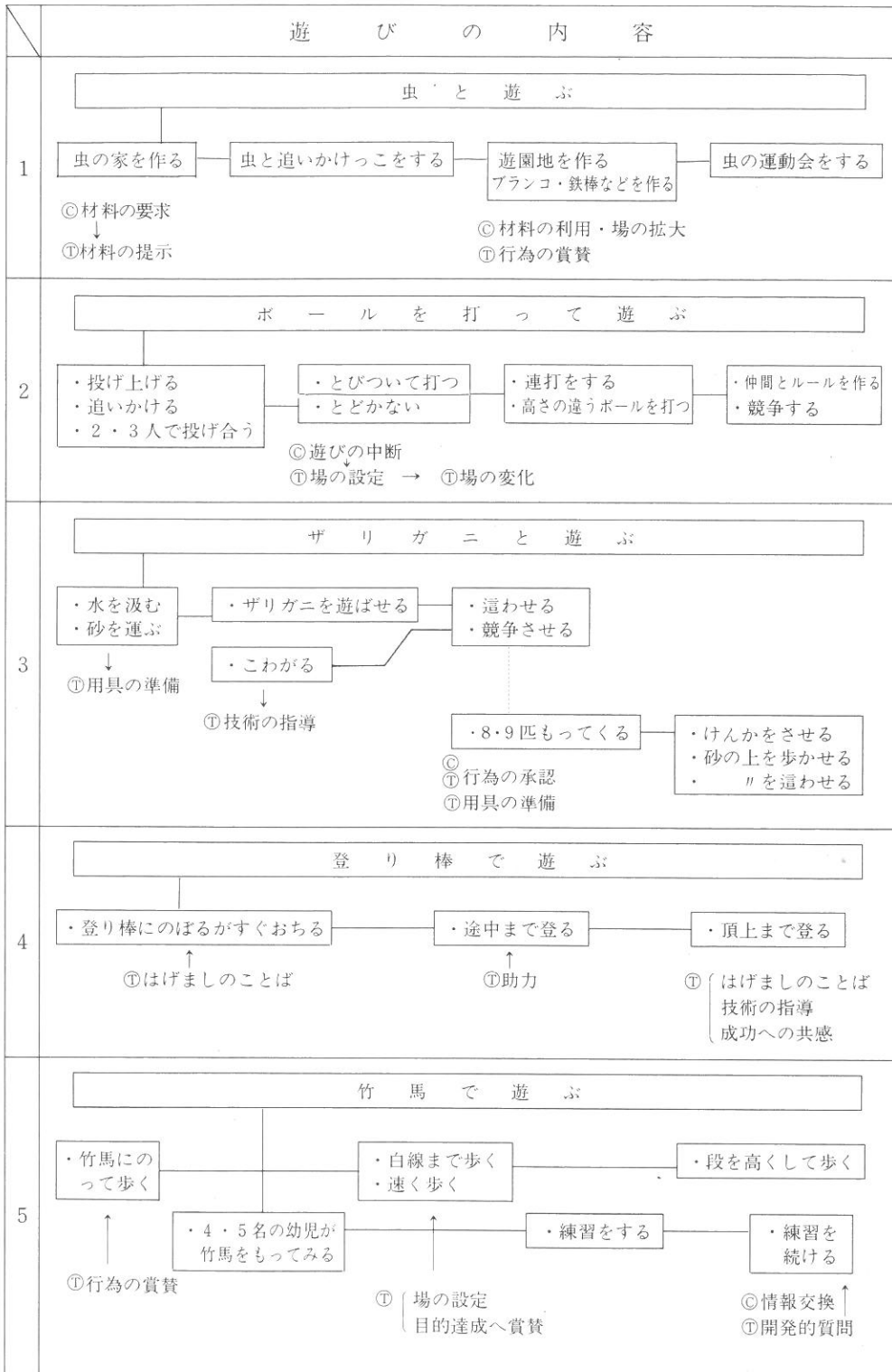
(2) 遊びの内容を発展させる要点

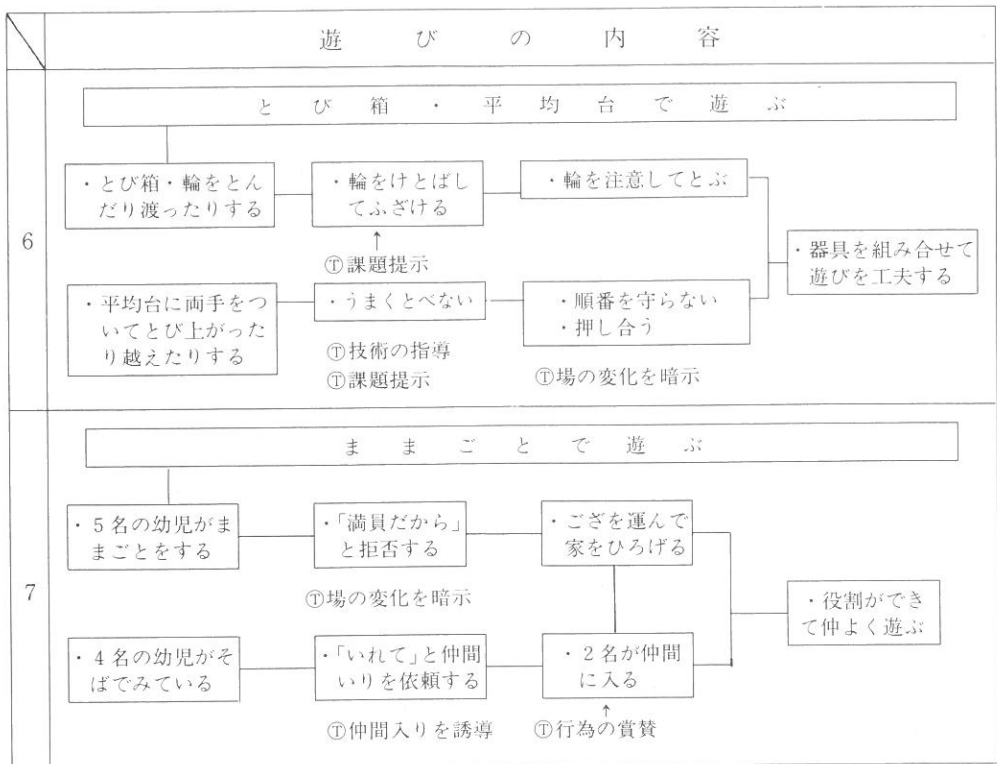
幼児が遊具や身近な材料・用具や動植物に興味や関心をもって遊びを始めても、その遊びは必ずしも教育的に価値の高いものに発展するとは限らない。質の高い遊びへと発達させるためには、必ず教育的な指導が必要ではないだろうか。

表6は、遊びを発展させたと思われる教師の働きかけを明らかにし、指導の要点からまとめたものである。

表6. 遊びの発展過程

◎幼児の活動 ①教師の活動





① 幼児の自発活動をのばすための用具・材料などの環境整備が必要である。

幼児は遊びを展開していく過程で、多くの遊具や用具・材料などを必要とする。事例1のように、幼児が虫に親しみを感じるようになると、「虫の家をつかってやりたい」「遊び場もつくってやりたい」などの欲求をもち、室内に常設してある積木を利用して創造活動を展開していくのである。そして、活動をしながらか次々と新しい遊びのイメージが広がり、その都度必要な材料を幼児自身が探してきたり、教師に要求してくるのである。たとえば、アイスクリームの空箱が虫のブランコになったり、またこおろぎを入れる手さげかごになったり、キビガラとひごを利用して鉄棒をつくったり、イチゴケースをプールやトイレや部屋に利用したり、小積木の板をすべり台にしたり、虫との遊びの中で幼児の発想は自由で楽しい。過去に幼児が生活の中で受けとめた印象を次々と遊びの中でよみがえらせていったものと思われる。

このように、用具・材料は幼児の遊びを発生させる手段となる。新しい遊びはこれらの用具・材料と幼児の事物の形象認識との相互作用によって創造的に発展させられるのである。

② 幼児一人ひとりの能力が発揮できる場の設定が必要である。

事例2は、教師が用意したビーチボールを幼児が発見し、投げたりついたり同じ動作を繰り返して遊んでいるので、教師は遊びの内容の変化を意図して、ボールを天井から吊したのである。幼児は吊されたボールに興味を示し、とびついて打つ遊びをしていたが跳ぶ力の弱い幼児はいくら挑戦しても成功しない。そのうち興味を失い、その場から逃げようとした。そこで教師はボールを1個から3個に増し、場の設定をA（ボールととび箱の距離150cm）、B（ボールとジャンピングの距離160cm）、C（ボールとゲームボックスの距離140cm）の3ヶ所にひろげた。このことにより、幼児は各自の興味や能力に応じた遊びをするようになり、どの幼児も成功感を味わうことができた。また仲間といっしょに遊びを展開していくとき、友だちと交代するた

めのルールを決めたり、競争する遊びを創造するなどして楽しんでいた。このように幼児相互の必要感から生まれたものを教師は大切に育ててやらなければならないと思う。

③ 遊びに必要な基礎的な技術や方法を知らせることが大切である。

幼児は身近な小動物や遊具に刺激されて自分から接近したい、試してみたいなどの欲求を持ちながらも過去の経験が乏しかったり、嫌な経験として残っている場合はいったん啓発された欲求は意欲的な行動にはならず、むしろ拒否的な行動となって現われることがある。このような場合には、教師の適切な助言や助力が必要である。

事例3にみられるように、ザリガニをこわがる幼児に安全なつかみ方を指導すると、次々と遊びが発展していった。また、事例4の場合は、登り棒に挑戦し、工夫して登ろうとしている幼児に最初は励ましのことばが必要であるが、それでもうまくできない幼児には登るために必要な棒のにぎり方、足のかかけ方を助言してやると効果的な動作ができるようになり、頂上まで登る目的は達成され、成功感を味わわせることができた。こうした基礎的な技術の指導は、表現活動の場合にも必要である。たとえば、はさみの使用の方法の指導により思いのままに製作活動ができたり、絵の具のかきませ方の指導により美しいマーブリングができたりする。

このように、教師の技術や遊び方の指導は幼児の遊びを円滑に展開させ、技術の習得だけでなく活動そのものに対する満足感や成功感を味わわせることになる。この満足感・成功感が次の活動への原動力となっていくのではないだろうか。

④ 遊びの中で課題意識を自覚させ、自分で解決するようにしむける。

幼児は習得した技術を発揮して、自分の遊びを展開していくものであるが、中には目的をもたず単調な活動を繰り返したり、無意味な活動を反復したり、わるふざけをしたりして積極性に欠ける場合がある。このようなとき、教師は幼児各自の能力差や性格に即した指導助言を行い、目的をもった遊びへと誘導してやる必要がある。事例5の場合には、教師が意図的に設定した一本の白線が幼児の活動に目的を持たせることになり、「あそこまで歩いてみよう」「今度は前より早く行ってみよう」「もっと高くして歩いてみよう」と幼児の課題意識は高まり活動が活発になる。竹馬で歩くことも技術的に発達していった。教師は無理な課題を提示したり、おしつけたりしてはいけない。できるだけ幼児自身が自分で遊びの目的をもち、目的達成へ向って努力することが大切である。

⑤ 遊びに参加できない幼児が仲間との人間関係がもてるようにする。

遊びに参加できない幼児には、遊びへの要求がない、遊び方を知らない、友だちがいない、わがままであるなどいろいろな理由が考えられる。事例7のように、多くの幼児がいっしょに遊んでいるところで、仲間に入りたけれどどうも参加できない幼児に対して、教師は遊びたい欲求を満たしてやる手だてをする必要がある。最初は「いれて」「満員じゃからいけん」と遊びに入りたがる幼児とままごとをしている幼児との交渉は成立しない。しかし、教師の暗示的指示により、ままごとをしている幼児が家を拡張することに気づき、ごぎを運んで部屋を広くした。そこへ、再度「いれて」と仲間入りを求めると「どうぞ」と迎え入れ、いっしょに仲よく役割を決めて遊ぶことができた。こうした人間関係を育てる場では、幼児相互に仲よくいっしょに行動しようとする気持をもたせることが先ず大切になる。そして、幼児の友だち関係が彼らの力関係で成立しやすい点に留意して、幼児一人ひとりが自己の意見や気持ちを表現できるようにし、その中で自分たちの遊びをつくり出していくようにしむけることが大切である。

以上、幼児が自発的に遊びを展開していくうえで必要と思われる教師の援助活動についてまとめたが、要するに、教師が援助する場合、幼児にとって教師がしてくれた、教師にさせられたという意識を与えないことである。幼児が自分の力で「やった」「おもしろい」といった感情

を抱くことができるような援助のし方でなければならないと言える。

おわりに

自由遊びは、時間的にみると教師が明確なねらいを設定して指導する学級全体で行う「ねらいのある遊び」と同程度であり、幼稚園の教育時間の中でかなり重要な位置を占めていると考えねばならない。したがって、自由遊びの指導は幼児の自主性尊重という名目のもとに、教師の指導を加えない放任の時間になったり、目標のない個人的な遊びであったりしてよいものだろうか。今日の保育が遊びをとおして、幼児一人ひとりの自主性や創造性を育て、心身の諸能力の円満な発達を促がし、人格発達の上で重要な役割をもつならば、自由遊びの指導にもっと注目し、検討されなければならないと思う。

今回は、幼児の遊びを教育的に指導していく上で、先ず明らかにされなければならない点、すなわち、何が幼児を遊びへ誘導していくのか、何によって遊びが発達し、発展していくのかについて分析しその結果から若干の指導の要点をまとめた。今後は、さらに自由遊びの時間の適切な配当、遊びの内容の系統性・発展性などを追求した指導法の研究を深めていきたい。

- 注1) 大久保 和子 「保育内容の分析(2)」
日本保育学会論文集 P 2—104 1974
- 注2) 大久保 和子 「保育内容の分析(3)」
同 上 P029 1977

参考文献

1. 坂本彦太郎著 幼児教育の構造
フレーベル館 1975
2. 倉橋惣三著 幼稚園真諦
フレーベル館 1976
3. 高橋省己・田中敏隆編著 幼児の発達と指導
ひかりのくに 1974
4. 神沢良輔著 保育内容の研究
光生館 1971
5. 西頭三雄児著 遊びと幼児期
福村出版 1974
6. ジュコーフスカヤ著 遊びによる幼児教育
坂本市郎訳 新読書社 1969
7. 「保育」 特集「自由遊びを考える」
ひかりのくに 1972. 3.

昭和53年3月31日受理